

文化

▼「鉄道唱歌」箸尾駅
大和郡山に住み、奈良女子高等師範（現・奈良女子大学）の教授を務めた水木栄太郎（一八六五～一九三二）に「大和鉄道唱歌」という作品がある。一九一八年（大正七年）に開通した輕便鉄道（王寺～田原本間）の会社から委嘱を受け、水木が作詞した。「汽笛一声 新橋を：」に名高いあの鉄道唱歌の大和版である。

近鉄橿原線田原本駅からすぐの西田原本駅で、同田原本線に乗り換えて新王寺ゆきの電車に乗った。水木が唱歌の二十三番に「又、東南に指さして、至る所は田原本、新王寺より六哩（マイル）三分の道を走り」と歌う、その逆コースを行く。

軽便鉄道の歴史に詳しい松藤貞人は、「沿線に見られる地理的景観、歴史を歌詞によみこんだ見事な唱歌になつてゐる」と言つ（『水木十五堂小伝』）。唱歌は、四十二番まであって、十五堂は水木の号。「十一 大野の称へ（ひなご）古（いにしへ）をしのびて過ぐる箸尾駅、下街道の要所にて人家は軒を並べたり」とある箸尾では、今も蔵造りの家々が並ぶ道を過ぎ、葉桜の緑濃い高田川に沿つて延々と歩いた。その先に、大和のかぐや姫伝説を残す讃岐神社（広陵町）がある。

な 民俗通信

286 西村 博美

▼式内社 讃岐神社
延喜式内社とはいえ、こじんまりとひつそりした境内に竹藪（やぶ）が一叢（ひとむら）あり、拝殿の奥笛一首「新橋を：」に名高いあの鉄道唱歌の大和版である。

鉄道開通から一〇一年目の先日、近鉄橿原線田原本駅からすぐの西田原本駅で、同田原本線に乗り換えて新王寺ゆきの電車に乗った。水木が唱歌の二十三番に「又、東南に指さして、至る所は田原本、新王寺より六哩（マイル）三分の道を走り」と歌う、その逆コースを行く。

軽便鉄道の歴史に詳しい松藤貞人は、「沿線に見られる地理的景観、歴史を歌詞によみこんだ見事な唱歌になつてゐる」と言つ（『水木十五堂小伝』）。唱歌は、四十二番まであって、十五堂は水木の号。「十一 大野の称

へ（ひなご）古（いにしへ）をしのびて過ぐる箸尾駅、下街道の要所にて人家は軒を並べたり」とある箸尾では、今も蔵造りの家々が並ぶ道を過ぎ、葉桜の緑濃い高田川に沿つて延々と歩いた。その先に、大和のかぐや姫伝説を残す讃岐神社（広陵町）がある。

▼「神をばぐくみ申す者」
わたしたちが「かぐや姫」の話として、なんできた「竹取物語」は、その筋書きをいまさら繰り返す必要もないだろうが、筆者の気になるところを取り上げ、本稿の回向かにわかつて追つてみることにする（テキストは、新潮日本古典集成『竹取物語』によつた）。

養ひ神であり幼な神

かぐや姫のものがたり（その一）



讃岐神社（広陵町）



同神社の竹藪

俗文化研究所研究員
（にしむらひろみ）詩人・奈良民

たれ。……手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす」。
社伝によれば祭神は、大国魂神、倉稻魂神、大物主神とされるが、「三代実録」に上散吉大命神、散吉伊能吉神の名が見える。朝廷に竹細工を獻じるため讃岐氏の一族が、大和の社伝老夫と謂つても幼い神をばぐくみ申した」と、いわばその養い親の折口は、「唯の夫と老婦として」、信仰を広め、国を巡行した神人物語の原型の一つに「竹取物語」を置いている。

また折口によれば、「竹取」のかや姫もまた「養ひ神」であるといふ。「つまり天つ処女が、此土地へ来ると言つことは、大抵の場合、幼神といひますか、養育神の形で、之を爺・婆があつてさて、本題の「竹取物語」に目をやると、冒頭にこうある。「今は昔、北葛城郡広陵町に移り住んだ」と人（じん）の歴史の大部分のかくの伝えが残る。

国広瀬郡散吉（さぬき）郷（現在の役割に触れている。またそれは、「神にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける」。一般に、「造（みやつ）」は、朝廷から任命された人（じん）の護持する神が、すなわち、「幼な神」であった。この物語が行われ、このようなどに育てるそぞらの表に浮べ出した古代の傳承が残る。

さて、本題の「竹取物語」に目をやると、冒頭にこうある。「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける」。一般に、「造（みやつ）」は、朝廷から任命された人（じん）の護持する神が、すなわち、「幼な神」であつた。この物語が行われ、このようなどに育てるそぞらの表に浮べ出した古代の傳承が残る。

さて、本題の「竹取物語」に目をやると、冒頭にこうある。「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける」。一般に、「造（みやつ）」は、朝廷から任命された人（じん）の護持する神が、すなわち、「幼な神」であつた。この物語が行われ、このようなどに育てるそぞらの表に浮べ出した古代の傳承が残る。

さて、本題の「竹取物語」に目をやると、冒頭にこうある。「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける」。一般に、「造（みやつ）」は、朝廷から任命された人（じん）の護持する神が、すなわち、「幼な神」であつた。この物語が行われ、このようなどに育てるそぞらの表に浮べ出した古代の傳承が残る。

さて、本題の「竹取物語」に目をやると、冒頭にこうある。「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、讃岐の造となむいひける」。一般に、「造（みやつ）」は、朝廷から任命された人（じん）の護持する神が、すなわち、「幼な神」であつた。この物語が行われ、このようなどに育てるそぞらの表に浮べ出した古代の傳承が残る。